

日本鑄造協会中国四国支部

藤原 慎二 支部長



は、ものづくりの基盤技術の一つ。自在な造形が可能で、自動車や船のエンジンブロック、建設機械の油圧部品といった内部が空洞で複雑な形状の製品は鑄造でないと造れない。日本の工業を

「鑄造は「ものづくりの原点」とも呼ばれる。高温で溶かして液体にした金属を型に流し込んで固める鑄造

中四国地方の鑄物メーカーなどが「日本鑄造協会中国四国支部」を発足させた。鑄造技術は自動車、産業機械などの幅広い工業製品の製造に欠かせないが、国内産業の空洞化などで業界を取り巻く環境は厳しい。支部長を務めるアサゴエ工業(岡山市南区箕島)の藤原慎二社長(65)に狙いや活動方針などを聞いた。(伊東圭一)

協会支部発足の狙いは

地域で競争力アップ

技術開発、人材育成に力



ふじわら・しんじ 1994年アサゴエ工業入社。97年から社長。日本鑄造協会副会長も務める。東京大工学部卒。静岡市出身。

支える存在と自負しているが、一般にはなじみの薄く、大手の下請けで仕事をしていた。中四国地方は、古くから農業機械や造船業が盛んな岡山県、自

日本鑄造協会 2005年、日本鑄物工業会、日本強靱(きょうじん)鑄鉄協会、日本鑄造技術協会の3団体が合併して発足した。全国の鑄造業者や原材料のメーカー、商社など約1千社で構成。最新技術の情報発信や、業界の活性化に向けた国への政策提言などを行っている。

つながりはほとんどなかったが、新技術の開発や人材育成などで連携し、地域全体で競争力を高めようとした。東海、北陸に次ぐ3番目の支部。原料や資材などの関連業種も含め約100社で構成し、事務局は広島県鑄物工業協同組合(広島市西区)に置

「支部は7月、中四国9県の中小鑄造業者を中心に発足した。大型企業が集積する広島県など、各地の産業の調査では、鉄を素材とする銑鉄鑄物の2012年の国内生産量は約360万トで、07年の約450万トから2割減少した。取引先の機械メーカーが生産拠点を東南アジアなどに移し、部品を現地調達に切り替えている。海外進出を図るにも、鑄造には1500度の高温で鉄を溶かす炉や、造形ラインなどの大規模な設備投資が必要。国内市場が先細り傾向の中、後継

者が確保できない社も多い。難局打開に向け、どのような活動を展開するのか。当面は経営改善などをテーマにした講演会や会員同士の工場見学が中心で、第1弾として今年20日に広島市で、事業継承のノウハウや、日本鑄造協会が策定を進めている業界の将来ビジョンについての講演会を開く。地域の技術レベル向上のため、日本鑄造協会が実施している高度技術者育成の研修会「鑄造カレッジ」の受講も会員に呼び掛ける。燃料費の上昇分を製品価格に反映させることに取引先の理解を求めている。価格交渉力も高めてきた